蒲生野の相聞歌（万葉20・21歌）

福沢武一

天皇、蒲生野に遊猟し給ふ時に、額田王の作れる歌

あかねさす紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖振る（二〇歌）

皇太子の答ふる歌

紫のにほへる妹を憎くあらば人妻故にわれ恋ひめやも（二一歌）

紀にいはく、「天皇の七年丁卯の夏五月五日、蒲生野に遊猟す。時に、大皇弟・諸王・内臣、また群臣、皆悉従ふ」といふ。

天智天皇が琵琶湖畔の蒲生野で猟を催されたのは同天皇七年五月五日のことで、左注に引かれている通りです。それは額田王が三輪山悲歌を奏でた後、一、二年のことと思われます。二〇歌の「君」は皇太子大海人皇子、二一歌の「妹」は額田王。これに天皇を加えた三者の関係については、いずれ文中でふれることになります。

ここでは主として次の点が問題です。

㈠　二〇歌は、解釈上、三、四、五句の切れ続きが問題になります。

㈡　二一歌においても、二、三句の切れ続きが問題です。

㈢　第三として、二〇歌・二一歌の連関が問題です。それは両作者の心情如何にきわまります。

以上の問題点をこの順序で検討します。結果は、期せずして通解の批判になっていくのです。

㈠　「野守は見ずや」

一

まず二〇歌の解釈です。

「紫野ゆき」と「標野ゆき」は、別人の別々な動作ではありません。類語を重ね、紫草を栽培した標野をあちこちするさまを表現したのです。

あちこちするのは「君」か？　それとも「野守」か？　そのとき、三、四、五句の切れ続きが問題となってきます。説は大別して次の四種です。

㈠　第五句は倒置で、第三句は意味上第五句へつらなる。

これが古注以来の通解です。訳文を一書に代表してもらいます。

紫草の植ゑてある禁園に、あち行きこち行きして、あなたが袖を振って合図をして居られるのを、番人は見てゐるではありませんか。（武田氏旧版全注釈）

㈡　第五句は倒置。三句（標野ゆく）は四句を修飾する。

これは山脇氏の解で、その訳文は、

紫草の生えて居る御猟場を往来する野守は、君が袖を振って

御供の女房に情を寄せ給うお姿を見ないか。（正訓）

㈢　第四句は挿入句。三句は五句を修飾し、第五句は連体形止めの余情表現である。

これは、佐伯氏の提唱で、所論は「万葉語研究」に収録されています。同解しているのは中西氏の講談社文庫本です。

その後、以上の諸説を批判し、次の新見を「万葉集新説」に寄せたのは沢瀉氏です。

㈣　三句は四句を修飾する。五句は倒置ではなく、独立文で、連体形の余情表現である。

この説に従うのは――沢瀉氏（大成三・注釈）・新版全注釈・賀古氏探究・次田真幸氏（講説・評釈）・三谷氏万葉古今新古今。

その訳文だけではいずれの説とも決しかねるものが若干あります。特に次の訳文が気になります。

紫草の咲いてゐる野を行きながら、標野を行きながら、野守は見はしないでせうか、あなたが袖を振りますよ。（土屋氏名歌評釈）同氏小径、同文

これを沢瀉氏は㈣に組み入れました。実は、㈢だったのではないでしょうか？　後には、たとえば私注で、㈠説をとるのが土屋氏です。

二

沢瀉氏が諸説を批判したことを一言しました。例によって周到な論述です。そこで氏の口つきを借用し、自分なりの結論を導きたいと考えます。

早速㈠説の検討から始めます。引用は沢瀉氏の「新説」所収論文です。

集中には無造作に考へて所謂四、五句倒置と見えるものが相当に多い。ざっと見ると五、六十首以上にも及ぶやうに見える。しかしそれらは正確に一、二、三、五、四と解すべきものではない。（一三〇ぺ）

沢瀉氏は多くの用例を引いて実証につとめます。その結論は次のようです。

第三句は第四句へつづいてゐる。否、三、四がはなせないから第五句が倒置せられたのである。……即ち、この五句の関係を図に示すと、

1―2―3
　　5 ＞ 4

といふやうになる。（一三一ぺ）

沢瀉氏は倒置と解せられた場合の主題歌に論及していきます。

明かに四、五の倒置と認められるのも、四、五が倒置だから三は五につづくと見るべきものは一例もなく……、もし本論の歌のみ「標野ゆき」を「野守は見ずや」をさしおいて、「君が袖ふる」につづけようとならば、特にしか認むべき論拠を示さない限り、その解釈は認め難いのである。（一三四―五ぺ）

主題歌の倒置説は致命的です。沢瀉氏の指摘はなおも続きます。

――倒置された結句に用言止めは極めて少いばかりか、いづれも中止形であることが注意せられ、「君が袖ふる」の如き連体形の例は一つも見えない。（一三八ぺ）

もはや倒置説の不成立は決定的です。

三

倒置でない、しかも三句は四句へつらなる――とすれば、沢瀉氏の唱える㈣説が最も有力になります。氏ご自身の弁証をきくことにします。

「野守は見ずや」は「しめ野ゆき」に立派につづく言葉なのである。「ゆき」「見る」の語をつづけたものとして「行きて見て」（二六九八歌）……などのほかに、

ひぐらしの鳴きぬる時はをみなえし咲きたる野べを遊吉追都見倍之（三九五一　秦八千島）

……うなひ川清き瀬ごとに　鵜川立ち可由吉加久遊岐　見つれども……（三九九一　家持）

などあって、「紫野ゆき標野ゆき」つつ「野守」が「見る」といふ事は極めてすなほに接続する事なのであって、代匠記にはやく「二の行は野守のゆくなり」とあるのは至当の事なのである。（一二六ぺ）

早速、次のような疑問が起きます。

――一歌の中心は「野守」なのか？　「君」なのか？

もちろん「君」です。ところが㈣の説だと、一体どっちだろうと惑います。説の発表当時から次のように借問されたのです。

上の句全部が「野守」にかかるとしますと、一首中「君」にかかるのは結句の「君が袖ふる」だけになります。「君」にむかって贈った歌ですから、少し物足らないやうに思はれます。（「新説」の一文中の沢瀉氏あて斎藤茂吉氏書簡）

これに対して沢瀉氏は最後の切り札を投げます。

しかし、「かう解釈する事が面白い」といふのでなくて、「かう解釈せざるを得ない」事が訓詁の第一歩でなければならぬ。紫草生ふるしめ野をかゆきかくゆきするのが「野守」よりも「君」であった方がよいやうに思はれたにしても、「野守」と解釈せざるを得なければ、その解釈の上に正しい鑑賞は生まれねばならぬ。（一四〇ぺ）

ちょっと陰口します。――ずいぶん力んだものですね。

その後の批判的な見解は次のようです。

紫野行き標野ゆきつつ野守が見るのだと解すべしという説が有力になりつつあるけれども、これだと作品の価値はずっと下落してしまわないだろうか。語法としてはその方が順当のようだが、しかし詩的措辞はしばしば超文法、反文法でありうるから、私はやはり作品としてのヴィジョンの方をさきに重んじたい。そうすると、紫野行き標野ゆくのはどうしても「君」でないとぴったり来ない。（西郷私記）

この（㈣説）如く解すれば、句のつづきは最も自然に解される事になると思うが、しかし短歌の制作心理より見る時は、一首の重みが野守の方に移ってゆくことになって疑問が残る。（大久保氏新釈）

ここでも、つい陰口がききたくなります。卑屈になることはないですよ、と。なぜなら、倒置の場合、沢瀉氏の批判は適正です。しかし挿入句の場合には必ずしも妥当ではないのです。

四

改めて挿入説に当たります。これまで保留しておいたのです。佐伯氏の一文を引用することで始めます。

これは「紫野行き標野ゆき君が袖ふるを野守は見ずや」といふやうな意味だといはれる。かう考へれば倒置ともならうが、或は、「野守は見ずや」といふ軽挙をせめた言葉を挿入したとも考へられようか。（万葉語研究二三七ぺ）

全く同感です。佐伯氏は次の類例を挙げています。

板ぶきの黒木の屋根は山近し明日の日とりて持ち参りこむ（七七九　家持）

この「山近し」は挿入句であって、「黒木の屋根は山近し」とつづくのではない。「野守は見ずや」を挿入句と考へるのに参考になると思ふ。（二三八ぺ）

これに対する沢瀉氏の反論は次のようです。

「山近し」は「黒木の屋根は」にぢかにつづかないものであり、これは明かに「あすの日とりて」の間に入れられた挿入句と見るべく、それに類似のものをあげれば、

針袋とりあげ前に置きかへさへばおのともおのや裏もつぎたり（四一二九　大伴池主）

磯の上のつままを見れば根を延へて年深からし神さびにけり（四一五九　家持）

など、第三句は第四句へぢかにつづかず、「おのともおのや」「年深からし」は挿入句と見るべきであるが、「野守は見ずや」は「しめ野ゆき」に立派につづく言葉である。（新説一三六ぺ）

沢瀉氏も挿入句の場合、その挿入句をまたいで、前後が連接することを認めています。ただし、その際は前後の断絶が自明だというのです。果たして上掲の挿入句の場合と主題歌との区別が絶対的でしょうか？

七七九歌は「黒木の屋根は」と「山近し」の間が切れています。四一二九歌も「かへさへば」で切れています。しかし四一五九歌は、「根を延へて」が「年深からし」へつらならないことが自明といいかねます。その証拠に、「年深からし」を挿入句と明言したのは新版の全注釈と沢瀉氏ご自身の注釈に限られているのです。

全く同じことが次の作品にもいえます。

みけ向ふ南淵山の巌には降りしはだれか消えのこりたる（一七〇九　人麿歌集）

主題歌と全く同じ構成です。第四句は挿入句であり、第五句は余情表現の連体形止めです。誤解されやすい点まで共通しています。うっかりすると三句を四句へつらねかねないのです。「巌には」と「降りし」の続きにだけ目をくれていてはいけません。主題歌の場合だって同様です。

五

佐伯氏の解説で気になることがあります。

「君が袖ふる」は、「袖ふることよ」といふやうな詠嘆的いひ方で、普通ならこの次に「野守は見ずや」といふのであるが、これを上にあげて文中にはさんだのは、今の言葉でいへば、

野守が見るじゃありませんか、袖なんかお振りになって、

といった心持になるのではあるまいか。①（前掲書二三七―八ぺ）

これに全面的に同調しているのは窪田氏です。

四、五句は意味からいへば、「君が袖振る野守は見ずや」といふことであるが、「野守は見ずや」を倒句として、挿入句の形において入れてゐる……。（同氏評釈）

これだと㈠の通説と本質的に相違が認められません。その成立からしても、本来文末にあったものを上にあげたというごとき性格のものとは思われません。「山高し」「おのともおのや」等々が端的な感概を表現していることを認めます。しかし、一歌の中心は、むしろ挿入句の次に当たる箇所、「明日の日とりて」「裏もつぎたり」等なのです。さればこそ、挿入句の前と後とが密接につらなって中心を高揚させるのです。挿入句そのものも中心を引き立てる薬味となっているのです。

これを要するに、挿入句の機能は倒置の機能と大差のないもので

はありません。本質的に特殊な機能をそなえているのです。

ここで確認していただきたい。挿入句が直接関係するのは直後の句です。いうならば、挿入句は次句に先行する詠嘆です。疑問・嘆き・不審・驚き、等々の主観を端的に吐露するところに意味があります。

改めて主題歌の句のかかりを図示します。

1―2―3
(4)〉5

(4)は、まさしく間投句です。1、2、3とせり上がって、一直線に5の頂点に達します。その頂点が高いばっかりに、(4)の主観的詠嘆が投入されたのです。頂点の5をせり上げるための投入でもあるのです。

先に沢瀉氏の説にふれ、否定を保留しました。そこでは四句までがひと続きに野守の動作を叙述し、ただ五句だけに詠嘆を点じました。せり上がりなど全然ありません。およそ挿入句説の比ではないのです。もはや否定を遷延させる必要はありません。まして、正訓の㈡の説は問題になりません。それは第五句を第四句の修飾としか認めなかったのです。

この句（第四句）は挿入句で、歌意は一・二・三・五とつづく。（全書）

この句（第四句）を中間にはさみこんだものとして解釈する。

……御料地としてのしるしのしてある野を行きながら、あなたは袖を振っていらっしゃる。野の番人が見るじゃございませんか。（佐伯氏評解）②

挿入句説を列挙しました。右の訳文は挿入句を後まわしにしています。そのため、せり上がる動きが皆無です。次のようにしたら多少は動きが認められましょうか？

紫の標野をあちこちしながら、（野守は見はしませんか、）あなたがしきりと袖をお振りになることよ。③

㈡ 「紫のにほへる妹を」

一

紫草のようにおうあなたを憎いと思ったら、人妻と知りながら恋をしましょうか。（小学館本による）

「妹を憎くあらば」の箇所はこのように通解されています。そこに疑問が懐かれます。

……よそふる君が憎からなくに（二六五九）

……海の玉藻の憎くはあらぬを（一三九七）

われこそは憎くもあらめ……（一九九〇）

このように、「憎し」は、ガ・ノ・ハ等に接続しています。「恋し」「かなし」なども同様です。ヲは異例です。「妹を憎し」を保存するために「憎くあらば」を「憎いと思うならば」にすりかえることは許されません。このことをつとに指摘したのは森本治吉氏です。所説は春陽堂版万葉集講座㈢の「万葉集品詞概説」です。

森本氏は主題歌を初めとし、多数の例歌を引いて詳論しています。ここには必要最少限の要点を抜記するにとどめます。

1　皆人を寝よとの鐘は打つなれど君をし思へばい寝かてぬかも（六〇七　笠女郎）

2　海山も隔らなくに何しかも目言をだにもここだともしき（六八九　大伴坂上女郎）

3　わが背子をいづく行かめとさき竹の背向（そがひ）に寝しく今し悔しも（一四一二）

4　夜並べて君を来ませとちはやふる神の社を祈まぬ日はなし（二六六〇）

5　天漢瀬ごとに幣を奉る心は君を幸く来ませと（二〇六九）

6　草枕旅ゆく君を幸くあれと斎瓮するつわが床のへに（三九二七　大伴坂上郎女）

右の「を」は、其の殆ど全部が、少し語を補入して解釈すると、目的格を示す格助詞としても解される気がするので、従来、曖昧のまま放棄されてゐた。例へば「麗しい妹を憎く思ふならば」「皆人を寝かせよとの鐘」「目言を何故にかしたはしく思ふ」「吾背子をどこかへ行かせようかと」等と補充して解するのである。しかし、かかる補充は便宜的なもので、補充の結果は原作の意とは異った別歌の解釈を立てたと同様になるし、中には目的格助詞としてはまるで解釈のつけ難い歌もあるから、補充的解釈を放棄して、此等の「を」は間投助詞として、殆ど歌意には無関係の語と見なし、「妹」「皆人」「目言」等はそれぞれ主語として解さるべきものである。（二〇二ページ）

この線で主題歌を受けとった注解を列挙してみます。

妹乎の乎は俗にガといふが如し。（注疏）

あなたが憎いならば　全釈・斎藤氏秀歌・斎藤瀏氏名歌鑑賞・窪田氏評釈・佐々木氏評釈・尾崎氏選釈・新潮古典集成本

ヲは間投助詞で、「妹」は主格。　森脇氏解釈と鑑賞・大系・竹内氏新講・大久保氏新釈

最後の数氏が「妹を」の解明にふれています。立ち入った考察は森本氏にきくべきです。

二

森本説をまともに批判したのは沢瀉氏です。氏の立場は通解とも異っています。その見解に耳を傾けましょう。

「を」を森本治吉君は間投助詞とし、「妹」を主格として解すべきものとされている。「心を痛み」④の「を」を同じく間投助詞とされると同じ意味で、文法的処理として一応認められるが、「心を」即ち「心が」でないやうに、「妹を」即ち「妹が」でなく、

皆人を寝よとの鐘は（六〇七）

わが背子をいづく行かめと（一四一二）

などの「を」と同じく「に対して」といふやうな意味を持った「を」でないかと私は考へる。（同氏注釈）

「を」に「に対して」を当てていい例が確かにあります。

しろたへの袖はまゆひぬ我妹子が家のあたりをやまず振りしに（二六〇九）

この「を」は「方に向かって」が通解となっています。異解は次のようです。

家の方を断えず振りまねいたので（総釈春日氏説）

家のあたりを懐しみ望んでの意（佐々木氏評釈）

「まねく」「懐かしみ望む」の省略が認められる位置ではありません。主題歌で「思ふ」を補入したのと同じ解法なのです。

……言はむすべせむすべ知らに　石木をも問ひさけ知らず……（七九四　憶良）

これも「石木に向かって」が代匠記以来の通解になっています。佐々木氏も、森本氏も異存はありません。そこで次のことを認めざるを得ないのです。

元来ニを使用すべき場合に、ヲを使用する格があり……。（全注釈七九四歌注）

しかし、主題歌の場合は問題です。「妹を」を「妹に対して」と換言しても意をなしかねます。

……美しい妹を、好ましからず思ふのであったら、（沢瀉氏注釈）

「に対して」を主張し、訳文は通解と寸分異らないことも理解に苦しみます。要するに、主題歌に関する限り、「に対して」の解法を潔く捨てなければなりません。

「を」をそのままで受けとる一説がまだあります。とても賛同できる説ではありません。引用だけしておきます。

イモヲのヲは下のコヒメの目的格として置かれたのであらう。コフは常にはニを取るのであるが、ヲを取る場合もある。これを次のニククの目的格としたのでは文理が合はない。（土屋氏私注）高安氏万葉の歌をたずねて、同解

三

森本氏が引き合いにした例歌の諸注に当たることにします。その間から主題歌理解の新しい途を方向づけえたら幸いです。

1　皆人を寝よとの鐘……（六〇七）

「皆人を」が主格、「寝よ」がその述語。――これが通解です。も一つの見解は「皆人を」は「皆人に」の意で、「寝よと」の次の省略部「告げる」へ修飾していきます。この説も成立可能です。引用の助詞「と」の直後には補足が認められるからです。⑤

2　……目言をだにもここだともしき（六八九）

「目言を」を主格に解さない注はありません。次の解説に尽くされています。

「を」について新考に、古今集㈣「あやなくあだの名をや立ちなむ」、㈥「香をだにほへ人の知るべく」などと同類だとしてゐる。間投助詞と見るのである。（沢瀉氏注釈）

沢瀉氏に反問したい。――同じものを主題歌に認めてはどうしていけないのでしょうか？

「を」は本来、間投的なものだったのです。固定する前、主格の場合にも、「に向かって」にも、もっとほかにも、幅広く使われたのです。1の「皆人を」などは、端的な呼び掛け「皆人よ」こそ一番ふさわしくないかと考えます。

3　わが背子をいづく行かめと……（一四一二）

「背子を」の通解は主格、「行かめ」が述語です。異解は「背子を」のまま受けとります。一例を示します。⑥

夫を何処へいらっしゃるものか、と高をくくって……（佐々木氏評釈）大系・沢瀉氏注釈、同解

「行かめと」の次には省略を認めてよく、成立可能です。

以上のようにして対立する二つの説を保留して来ましたが、次の例歌は当否を決する試金石に等しいと思われます。

4　夜並べて君を来ませと……祈のまぬ日はなし（二六六〇）

「夜並べて」は「来ませ」を修飾しています。従って、「君を」も「来ませ」との関係でなければなりません。諸注は、――

(1)　君がいらっしゃるようにと　武田氏（総釈）・全釈・佐々木氏評釈・大系・沢瀉氏注釈……

(2)　君にいらっしゃるようにと　武田氏全注釈・窪田氏評釈

(3)　君をよこし下さいと　折口氏口訳・私注・大成一三

(3)は「来ませ」の語義を曲解しています。「君を」を「来ませと」の次に修飾させた(2)は認めかねます。ということは、13の場合も、次の56の場合も、引用の「と」以後に「……を」を修飾させる不可を証していると考えます。

5　……君を幸く来ませと（二〇六九）

ここの(1)説は、全釈・大系・沢瀉氏注釈など。(2)(3)は語るに足りますまい。

6　……君を幸くあれと（三九二七）

ここで(1)説は、――佐々木氏（総釈・評釈）・全釈・窪田氏評釈・大系。

諸注の検討はこれまでです。

要するに森本氏の説が正統だったのです。「を」は間投助詞です。その本来を考えれば、六〇七歌の「皆人を」のところで一言したように、呼び掛けこそふさわしい場合がないではありません。4 5 6がそれです。4を例にしますと、

「毎晩、あなたよ、おいでください」と……祈らない日とてないのです。

四

呼び掛けに関連させたい「を」が別にあります。森本氏の例の一文にきっかけを求めることにします。まず例文です。

7　大夫と思へる吾をかくばかりみつれにみつれ片恋をせむ（七一九　家持）

8　しばしばも相見ぬ君を天漢舟出はやせよ夜のふけぬ間に（二〇四二）

9　ねもごろに思ふ吾妹を人言の繁きによりてよどむ頃かも（三一〇九）

諸注等しく「を」に「……なのに」の訳を与えています。わずかな例外が次のごとくです。

7　自分は立派な男だと思ってゐる。だのに……（折口氏口訳）

8　しばしばお会いするあなたではないのですから……（大系）

ヲは、名詞（その上には常に連体修飾語がある）についても逆接を表すことがある。歌中のナクニと同様、かかるところが禁止または命令である場合は、順接と解することもできる。ここもその一例。（小学館本二〇四二歌注）

森本氏はこれらの例歌の上に次の一類を設けました。

「……なるものを」と訳されてゐる「を」で、「名詞＋を」で、文が一旦切れる形である。併し、此例の大部分はその名詞が下の文の主語や客語や補語になる。故に形の上では切れるが、意味の上では続く。従って此時の「を」を接続助詞と見る人が多い。但しヲ自身に接続の働きはなく、ヲは唯感動を添へる。（前掲書一九七ぺ）

森本氏は「を」に区切れを求めました。先の7（七一九歌）の折口氏の理解に徹した解法です。ここに改めて表明します。全く同感だ、と。

森本氏はこの「を」について述べています。

「よ」と訳して当る。（同上書同ぺ）

呼び掛けの「よ」ではありません。感動をこめた述部を構成するのです。「……なのだ」と訳したらいいでしょう。「吾を」で結ぶ次のような数例と同等です。

むらさきの名高の浦の名告藻の磯に靡かむ時待つ吾を（一三九六）

（……靡いてくれる時を待っている私なのだ。）

それにしても、「を」が前段の結びになる時、前段と後段の関係が問題になります。例歌の789を見てください。前段は前提です。既定の前件です。後段が予想に反する時、違和がますます強調されます。前段にかなう後段は格段に強調されるのです。念のため例歌

に訳を与えましょう。

7　男一匹だと思っていた私なのだ。いまこうまでやせ衰えて片恋せずにいられないでいることよ。

8　しばしば会えもしないあなたなのです。天の川の舟出を早くしてください。夜のふけないうちに。

9　心から愛しているあの子なのだ。人のうわさがしきりなために会えないこのころであることよ。

五

ところで主題歌はどうでしょうか？

㈠　妹なるものをの意なり、（古義）吉原氏詳解、同解⑦

㈡　ほれぼれとするようないとしい人だ。そのお前が憎いくらゐなら（折口氏口訳）

そこもとわ、紫草の様に匂おて居る美しい女である。それだからなかなか忘れられないのである。もしそこもとお愛する情が少しでも以前より冷めてあるならば、今わはや人妻であるから、我わ、そこもとお恋いよおか、恋いわしないのである。（山脇氏正訓）

はでばでしい彼女よ。それが、憎いくらいなら（折口氏日本古代叙情詩集）

㈢　紫草の色の映えるような、はでやかに美しいお前よ、お前が憎いと思うなら（山本氏文芸読本）

紫草のようにはでばでしいわが愛人よ、たとえお前が人妻だって、なんで焦れずにおられようか（万葉百歌池田氏訳）⑧

解法が出そろっていて驚きます。年次順に次から次と導かれたことも明白です。

まず㈠ですが、通解より上です。「はなやかなあなたを憎く思うならば」は平板だからです。「におやかなあなたが憎いならば」の解も同様です。㈠ですと、「うるわしいあなたであるのに、」（吉原氏詳解）のように「におやかさ」が働きをもってきます。

しかし不満が懐かれます。「におやかなあなただけれど、憎いなら……」と、なぜことさら「憎さ」にこだわるのでしょう。この物言いは消極的すぎます。

㈡は「妹を」に句切れを求めました。一、二句は「妹」の絶賛になったのです。先の例歌789を想起していただきたい。一、二句は一歌の前提です。そこから三句以下の心情が自然と導かれてきます。

ひとり正訓は「憎し」を「愛する情が冷めてある」と解説しました。これは「憎し」の意味内容を稀薄にしたもので、従いかねます。「憎し」は愛憐の反対です。だしぬけに口にされた「憎くあらば」は、憎んで当然な面のあったことを暗示しています。詳しくは次章でふれることにし、その憎しみを解消し、人妻であることをも問題としない恋心のただごとでなさを確認したいと思います。その恋にいま現に身を任せているのが作者大海人皇子です。恋心は一、二句にまともに吐露されています。それは心情の端的な揚言です。三句以下は裏側からの念押しであり、細説に当たるものです。補足です。その意味で次の陳述は適正だと思います。

「を」でつながれた第一の事実「汝は紫草の如く匂へる妹なり」わ、第二の「人妻なるも我は猶汝を忘るる能はず」とゆう事実の根拠になるものである。（正訓）

一、二句はどんなに強くても強すぎることはありません。㈢の呼び掛けともとれます。が、情念の表白としては㈡の「あなたは紫色が映えるように、かがやかないとしい人なのだ」の陳述にはるかに

及びません。この陳述を作者その人が選んだことを信じたいのです。

以上のような意味あいから次の感受は見逃せません。

この「を」は感動をあらわす「を」だと見ることもできます。直接に「憎し」にも「恋ふ」にもつながらないで、とにかく「にほへる妹」と感動したと見、「を」はそれに余韻をもたせたと考えてはどうでしょうか。（高安国世氏万葉の歌をたずねて）

六

最後になって追記します。最初から気になっていたことです。冒頭の「紫の」です。問題は、枕詞・序詞一般にわたることはもちろんです。

「ムラサキノにほへる」を諸注に当たると次のようです。

(1) うるわしい　折口氏口訳

(2) 紫草のようにうるわしい　美夫君志・旧版新講……

(3) 紫草が咲きにおうようにうるわしい　佐々木氏選釈・沢瀉氏新釈……

(4) 紫色のようにうるわしい　全釈・武田氏（新解・全注釈）……

(5) 紫色が映えるようにうるわしい　山田氏講義・斎藤氏秀歌・沢瀉氏注釈・坪野氏秀歌・全書・佐伯氏奈良時代の国語・西郷氏私記・堀内氏万葉の恋歌

山田氏の所説が断然光っています。暗夜の北斗のように。要点を抜記します。

これは次の「にほへる」に対する主格にして、「紫のにほへる」といへる一の句を以て妹を形容せるにあるなり。……もし「如き」といふ語を加へて釈せむとせば、「にほへる」と「妹」との間に入れて「紫のにほへる」如き美しき妹と解すべし。（同氏講義）

この見解に沿うのは先の(5)です。通解は(4)です。(2)(3)が選べないのは、紫草の花は見る影もないからです。(1)は枕詞の働きを最小限に評価した結果です。いうならば、山田氏は最大限に評価したのです。そして、それが正しいというのは我田引水でしょうか？

その後、佐伯氏が山田説を全面的に支持しました。（奈良時代の国語参照）

歌意として重要なのは「にほへる妹」です。その「にほふ」を導くために「紫のにほふ」と冠しました。これは歌意からいえば従ですが、「紫の」で切って「紫色のように」などとすべきではありません。「紫の」は「にほへる」までくいこんでいます。音義とも「にほへる妹」まで有機的につながっています。いうならば、主旋律に対する陪音が枕詞・序詞なのです。その陪音は切り捨てるべきではありません。

紫のように「にほへる妹」ではなく、「紫のにほへる」ことが「にほへる妹」であるという風に、両者が直観的に一瞬に結合しているわけで、修辞的には「ように」の媒語を経ない枕詞的比喩に近いであろう。（西郷氏私記）

その通りです。「にほへるように」と補ったのは便宜だったのです。

以上で追記を終わります。ぜひ追記したかったわけがおわかりでしょうか？　一、二句の陳述性を確保したかったのです。もともと確保すべき一歌であったと思うのです。その時、一、二句は一片の呼び掛けではなくて、

――紫色が映えるようにかがやかなあなたなのだ。

このように大前提らしい揚言になるのです。

㈢ 「憎くあらば」

一

「野守は見ずや」といえば、

野守は見はしないか、の意で、しかも見られる事を恐れる不安の気持のこもったものと見るべきであらう。（沢瀉氏新釈）

これに対する答歌は、――見られなどしない、とか、見られてもかまわない、とか、なにか不安にふれた発言があって当然です。ところが、大海人皇子は二一歌でそのことにふれようともしていません。

これはゆるがせにできない問題です。あまりにも有名な相聞歌ですが、その相聞たるゆえんが不明のままもてはやされていることは奇態です。ただ前にも後にも一人、伊藤左千夫がこの点にまともに立ち向かっています。

多くの解者が、此の歌を以て直に前の額田王の歌に和したものとしてあるは眼識の至らぬのである。此の集の例に、直に歌に答へたものには必ず和歌と書いてある。茲にはそれが「答御歌」と詞書があるは聊か証とするに足るのである。詞書などにそれほど重きを置けぬは勿論であれど、第一に此の御歌は前の女王の歌に和したといふ点は何所にもないは見る通りであるから、此の詞書に例異った「答」の字のあるは注目すべき価がある。（左千夫新釈）

この説を必ずしも採りません。しかし、耳を傾けるべきだと思います。二一歌が「答歌」になっていない点を左千夫は端的率直に言明しました。その解決のために題詞を疑う途をとりました。

敢えて提言したいと思います。題詞を疑う前に、作品の理解そのものを反省すべきだ、と。つまり、諸注は自己批判すべきだったと考えるのです。

左千夫の見解は、それ以後、ほとんど進展をみませんでした。歌解の方も一進一退を続けました。本章の主題は「答歌」の意味探索ですが、二〇歌の歌解にかかわります。以下、年代的な素述をこころみることにします。

二

さばかりに、左ゆき右ゆき吾を招きて、懸想の容貌をな為たまひそ、吾方の警衛の者等の見とがめむにと、恐れ憚りて作て奉らせたまふなり。（古義所収中山厳水説）

これが従来の通説というものです。その後も原則的に支持されています。

紫草の花の咲いてゐる野即ち天子の御料の野を通って我がなつかしい君が袖を振って、私に思ふ心を示してゐられる。あの優美な御姿を、心なき野守も見てはどうだ。（折口氏口訳）山田氏講義・橘氏拾珠、同解

これは大きい後退です。「野守は見ずや」を曲解したのです。

野守を天智天皇にたとへたのだ、といふ説もあるが、こじつけである。単純に客観的の歌と見れば、愈すぐれて見える歌である。皇太子の御歌は、寧ろ此歌の内容に深く交渉をもったものと見ないがよい。（同上書）

これは誤解の上塗りです。

かかる場合の贈答は各自別々な事をいふことも実際少くないし、殊にかうした客観的の歌に対する答歌としては、それより外に方法は無いのである。況やそんな解釈をくだしたところで、この歌と答歌との内容がしっくり合致せぬことは五十歩百歩な

るに於てをや。（拾珠）

こうして通解と刺しちがいをやったのです。もっとも、通解は余命を保ち、「客観的描写」の面が継承されます。

この歌の場合の野守は野を守る者を漠然といったもので、天智天皇を指し奉るとか、諸司だとか、警衛の者だとか、額田王をも籠めたものだとか、精細に詮索すると、歌の妙味は無くなってくるのであり、また作者の心の奥底には天智天皇や諸臣などといふ写象があったにせよ、歌ふに際しては、単に野守と言ってゐるのだから、その時の作者の写象には野守といふもので最も鮮明に浮んで来てゐるのである。鑑賞者は第一其処に目を附けなければならない。……今ならば、「ヒトが見るではございませんか」といふところである。（万葉研究(上)斎藤茂吉氏説）

客観描写の立場です。野守が軽くあしらわれ、同時に、答歌が答歌でなくなりました。同じことが土屋氏にもいえます。

「野守は見ずや」と心配らしく言っているが、しかし内心はそれを非常に嫌ふとか恐れるとかして居るのでないことは、全体の調べのうへに十分汲取ることが出来る。気にしながらも寧ろ甘えて居るやうに見えるのである。野守は勿論実際の標野の番をして居るものを指すのであらう。（土屋氏小径）

ただ余りに人目に立ちすぎる袖の振方に、「野守は見ずや」の句が生まれたのであらう。（同氏私注）

明るくて、朗かで、甘えたりして、なんと仕合わせなこと。だが、そんなにめでたい主題歌だったでしょうか？

かりにこのようだったと認めましょう。その時、二一歌はどのように答歌になっているのか？……この問題解決へは一歩近づくどころか、二歩退いただけなのです。

額田王を中心にして或る種の葛藤の存した如く考へるのは思ひすごしたものと言はねばなるまい。此の歌にもさうした陰影はなく、華やかな初夏の行事に伴ふ明朗なる感興を汲むべきである。（同上書二一歌注）

三

その後、折口氏は「野守は見とがめはせぬか」の立場へもどりました。（鑑賞短歌大系(四)万葉恋愛歌読本）

そこから改めて次のような横道へそれていきました。

右の唱和の御歌は、宴会の座興を催した歌と見てよいと思ひます。（同氏恋の座一七四ページ）

野守を天智天皇にあてて考へるのは考へすぎになる。さうした内容的にゆきすぎた昔からの解釈を忘れた方がよいやうである。それに又、当時かうした関係について後世ほど気にやまないのだから、もっとあけひろげた気持の上に、互に戯れ合ってゐるやうな所を感じてよい。

この御製にも、軽いユウモアが見られる。而も多くの聴衆・観衆をひかへて、ざっくばらんに、誇りかに、かの愛情をそそる様な物言ひの所がある。（同氏古代叙情詩集）

もはやまともな贈答などではなく、公衆を前にした演技と化しています。「不安」などは一切ようはないのです。

この後に目ざましい進展がきます。佐伯氏の「野守は見ずや」挿入説の提唱です。それについては前章にゆだね、同説に賛同する谷馨氏に耳を傾けます。

王の懸念による訴え、あらわな仕種を禁めようとする意も、諸抄の多くの言うが如き深刻なものではなく、何れかと言えば軽く、一種の艶やかさを伴うものであったと、私には解されて

くるのである。第四句に「不見哉」と、反語になる助詞「哉」を用い、結句を詠嘆の連体止とした句法も、そうした心の弾みを現わしていると思う。茂吉の「ヒトが見るではございませんか」の口調は、そうした機微に触れたものとして、私には面白い。即ち、下二句それ自体に、女の媚態が、言外の情として湛えられているのであった。野守が字義通りの意であるとすれば、彼等の見ることなど、二人にとってさしたる問題ではない。ふと胸を掠めた程度の懸念であって、諸注の言うが如き強い「不安」とまで考えるを要しない心ゆらぎと見るのが歌意に即して自然ではあるまいか。媚態は、そこに生まれてくるのである。

（谷氏「額田王」）

谷氏の論旨には客観説が大幅に物を言っています。不安は半ば、半ば以上、影をひそめ、媚態が前面に大映しになっています。その明るさ、「軽み」は折口説と土屋説に二脈も三脈も通じています。それはもはや遊びの世界です。「答歌」の問題解決などとっくに超越してしまっています。

折口説が完全に復活したのはその後です。教え子たちが師説を顕彰したのです。

この唱和の歌は、狩猟のときの宴席の歌である。宮廷で、そのころ詞才をもてはやされていた額田王が宴席の座興に歌ったのだ。「野守は見ずや」と言っても、余興であり、仮構であって、あけひろげた気持での戯れなのである。

それに対し大海人の歌は、女の即興の戯れに即座に応じたゆとりが見られる。これももちろん、自分の真情を吐露しているように見えて、実は大勢の聴衆・観衆を前にしての座興なのである。その唱和の歌を言葉通りに取って、そこに秘められた悲劇的な恋を想像する読者は、作者にうまくかつがれたことになる。（山本氏文芸読本）山本・池田両氏共著万葉百歌・堀内氏万葉の悲歌、同解

これは笑うべき邪説です。

もし主題歌がそんなものだったら、僕は公然と言います。――額田王、大海人、そして万葉、糞くらえ。

実は、そうでないことを信じます。万葉を、万葉歌人たちを、護らなければならないと思うのです。

四

谷氏は挿入句説の立場でした。だったら、もっと別な結論が出たはずです。挿入句の理解に徹しなかったばっかりに、半歩の前進も望めなかったのです。

挿入句が宿す疑問・反撥・不審・詠嘆等々は、その直後の句に関係します。そのことは先にふれました。念のために一例を掲げます。

大夫や片恋せむと嘆けども醜の大夫なほ恋ひにけり（一一七　舎人皇子）

挿入句「醜の大夫」は自嘲です。自嘲すべき当のことは「なほ恋ひにけり」です。それを先取りして「醜の大夫」と置いたのです。先取りしたことに意味があります。「なほ恋ひにけり」が事実の陳述であるのに対し、純主観的想念であることが最も重要です。結果的には挿入句のかかわる箇所、例歌ですと「なほ恋ひにけり」を浮き彫りにする役目を果たします。「なほ恋ひにけり」は一歌の中心です。挿入句は引き立て役、添え役なのです。毛色の変った脇役というべきでしょう。自らの愚しい行為（客観）を、も一つ別な立場の自分（主観）が嘲笑し、主題をいやが上に高揚させているのです。

同様にして、主題歌の挿入句「野守は見ずや」は「君が袖ふる」

に直接関係します。「袖ふる」は連体止めで、余情表現です。挿入句を省いて訳を与えれば次のようになります。

……標野をゆきつきつして、あなたが袖を振ることよ。

「君が袖を振ること」が大映しにされています。それはあきれんばかりです。それを目にし、作者自身の不安な気持ちを端的に表白したのが「野守は見ずや」です。いうならば、それは傍白なのです。大海人その人は、不安もものかは、大胆不敵に振舞っています。それが二〇歌の主題です。「野守は見ずや」は額田王の私的なつぶやきに過ぎません。それをいちいちとり挙げていたら野暮です。野守など――それがなにだったにせよ、最初から大海人の眼中になかったのです。たぎる心を一直線にぶちまければよかったのです。もう理屈ではない。がむしゃらに感情をたたきつけたのが大海人の二一歌です。激情に身をまかせている大海人を傍から写しとったのが額田王の二〇歌だったのです。

額田王はすでに天智天皇のものとなっています。マセの意識が大海人になかったのではありません。憎かったらマセを守れたことを自ら認めています。あまりにもにおやかなためにマセもマセでなくなってしまったことも二一歌で告白しています。その結果がすでに二〇歌で歌われた通りです。野づらをあちこちしつつ、あられもなく袖ふっているのです。ひとりはらはらしている額田王こそ人妻のマセの中にとどまっています。マセを越していたらはらはらなどしません。「野守」は、いうならば、マセの象徴になっているのです。

五

一つの疑問を長年懐きつづけました。二一歌の「憎くあらば」が唐突で、その意を汲みかねたのです。これについても左千夫一人が立ち入っています。前に引用した長文の続きです。

予の考では、此の御歌は額田王の言伝か消息などに答へて詠まれたものと思ふ。……女王の心情を少しく推測して見れば、心の内は少しも変りなく、今天皇に召されて居るは全く余儀なきためとは云へ、眼の前にて人妻と他人にかしづき余所々々しくあひしらはれては、皇太子も定めて自分を憎く思召しであらう、歌にも云へる如く、「野守は見ずや」など頗る他を憚った態度をしたやうな事で、俗にいふ「あれほど余所々々しくせなくとも」など皇太子が思召しはせまいか、以上の如き意味で女王は必ず皇太子に対して、定めて憎く思召さむと云ひ送ったらうと思はれる。此の歌に「憎くあらば」の詞の出たといふも、必然、以上の如き女王の詞に対してであると云ふこと遠い推測ではあるまいと信ずる。（新釈）

残念ながらそのような推測を信じかねます。額田王の心情も左千夫が推測したごときものとは思われません。それについては後にふれるとして、いろいろな推測より先に、題詞を信じてかかりたいと思います。「額田王の歌」があって、その次に「皇太子の答ふる御歌」とあったら、前の額田王の歌に答えたはずでしょう。そのように理解すべくわれわれは努めるべきです。

左千夫に学ぶべきことがあります。「憎くあらば」を重視すべきことです。作者たちはまともな解説など与えていません。ただ関係ありと思われるのは「人妻」の一語です。

思えば、額田王は単純な人妻ではありません。つい最近まで互いに思い人でした。いうならば大海人を置き去りにした当人が額田王です。愛していただけに、憎いのが当然です。額田王の方からいえば、憎まれて当然至極です。

君待つとわが恋ひをればわが宿のすだれ動かし秋の風吹く（四

八八　額田王）

かからむとかねて知りせば大御船はてし泊に標結はましを（一五一　同）⑨

これらの作品は天智天皇に身も心も寄せていた額田王を伺わせます。そうした「人妻」を憎ませなかったものは、大海人の口を借りれば「紫のにほへる妹」でした。四十歳がらみの額田王は容色なお衰えず、円熟の魅力に満ちていたでしょう。もっと大切なことを考えます。離れ去っていくまでの額田王の心根を大海人は忘れることができなかったはずだと思うのです。

斉明四年、すでに別れを覚悟して血の涙を流しています。

泣かまくも慕ひこそ行けわが背子がい立たせりけむ厳橿がもと（九　額田王）⑩

それから約十年、執行猶予のような年月がつづき、二度目で最後の血の涙を流します。それが三輪山悲歌です。

三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなも隠さふべしや（一八　額田王）⑪

その間にも幾ら泣いたか知れません。とても憎めなどしない大海人だったと思われます。標野で額田王を目にしては、ほとんど衝動的に振舞った大海人に相違ありません。

主題歌と相前後して次のような事件がありました。

帝、群臣を召し、浜楼に置酒す。酒酣にして歓を極む。ここに皇太弟、長槍もて敷板を刺し貫く。帝驚き、大いに怒りて、まさに執へて害せむとす。大臣固く諫め、帝即ち止む。（鎌足伝）原漢文

これを主題歌へ引きつけようとするのではありません。しかし、大海人の衝動的な点は共通しています。激しやすい点では天智天皇も負けてはいません。二人の男をとりもったのは鎌足でした。恋のいきさつにおける橋渡しは額田王その人だったと思われます。彼女を憎く思わなかったのは大海人ばかりではありますまい。壬申の乱の生起などはおよそ彼女の関知するところでなかったと考えます。

六

あれもこれも、思いつくまま述べました。ぼやけた焦点をしぼりなおす必要を感じます。

二〇歌は「野守は見ずや」を大海人に訴えたのではありません。——ずいぶん袖をお振りですこと。……これが表の歌意です。裏は、——もう私をすっかり憎んでおいでと思いましたのに……。

これに対する大海人の答えは、——憎かったら袖を振りもすまい。いとしいばっかりに、こうして恋いこがれないではいられないのだ。

最後に改めてふれずにはいられません。論述の途中でも気になってならなかったことです。

二〇歌に額田王の心の傾斜を認めること、つまり大海人への媚態を感得することが、通念のようになっています。

詞の上に恋ふる意味がなくて却って相思の念禁じ難き趣がある。（左千夫新釈二〇歌評）

その動作は、額田王に対して如何に快感を誘発せしむるものであったかは、第一、二、三句の調子によっても解し得る所である。（赤彦氏鑑賞及び其批評二〇歌評）

等々々、列挙の煩にたえません。ついに次のような傍白がとび出すのです。

額田王の作の方に多くの姿態の見えることは嫌味とまでは言はないにしても、皇太子の御歌の勁直真率なるのには遠く及ばないやうに思ふ。（土屋氏万葉集百首）同氏小径巻末所収

私感を述べます。

諸家が受けとっている額田王の姿態は嫌味の限りです。娼婦のように不潔です。それを賛美称揚している人々の気が知れません。

ただし、それは誤読からきています。額田王その人と作品が関知するところではありません。

谷氏の引用文には「媚態」が繰り返されていました。それに劣らぬ語を費すのは田辺氏です。

馥郁たる色気に包まれつつ匂うように、はずむように、甘美な情緒を伴なって発せられているのである。(同氏初期万葉の世界二〇歌評)

媚態や色気を感じたのは読者の勝手です。額田王が辞を尽くして表現したのは自らの媚態などではありません。それは大海人その人の驚倒的な振舞いだったのです。額田王自身の心情は「野守は見ずや」のつぶやき一つです。

されば申したい。わが額田王に皆してぬれぎぬを着せないでほしい。彼女は娼婦まがいの女性ではないのです。

注

① 「君が袖ふる」は詠嘆的な表現です。文字通り「袖ふることよ」でなければなりません。その点、佐伯氏の訳文「袖なんかお振りになって」は自家撞着を犯しています。ここに一々挙げませんが、同じ誤りは数氏には限りません。大目に見すごすことができかねます。一歌の中心が五句から四句へ移ってしまったのです。

② 佐伯氏は次のように適確に指示しています。

「君が」とあるので、「振る」は連体形、振ることよ、という心持ちになる。(評解)

どうしてそれを訳文に生かさないのか、理解に苦しみます。これまた佐伯氏一人ではありません。

……まあ、野守が見はしないでしょうか、あなたはそんなに袖などお振りになって。(大系)

この訳文などはメチャクチャだと思いませんか?

③ 諸説を四種に大別しました。いまになって異解があることに気づきました。孫引きによって曲りなりの紹介をこころみます。

石田庄蔵氏が第三句「標野行き」を万葉に幾つか例の見える連用形中止法の特殊な用法とされ、第一句から第三句までは客観の景、もしくは行動であり、第四句は疑問・不安、もしくは警告であって、それを中止的につなぐのが「標野行き」の「行き」であるとされたのに従いたいと思う。(大久保氏新釈)

右の理解による通釈を大久保氏から引きます。

……あちら行きこちら行きなさって、まあ野守が見るじゃありませんか、袖なんかお振りになって。(前掲書)

その特殊な用法は一五歌の「入日さし」、一四一歌の「引き結び」等に相違ありません。それは特殊ではなくて、原因・結果を意味することを拙著「省察」㈠で指摘しました。それによって通釈を補正します。文末も改めなければなりません。

あちら行きこちら行きなさるので野守が見るじゃありませんか。袖をお振りになることよ。

局部的には不可ではありません。全体を見るとき、一歌の中心が四句と五句の二つに分裂し、㈣説と同じような結果に終わります。

④ この「を」は文法的理解が二つに分かれています。

㈠ 詠嘆の間投助詞。次にくる「―み」は自動詞的。宣長(遠鏡・玉藻)・山田氏講義・森本氏前掲書・総釈㈠武田氏解・窪田氏評釈

㈡ 格助詞。「―み」は他動詞的。佐伯氏奈良時代の国語・沢瀉氏注釈

本来は「宮に行く児を真悲しみ」(五三二)、「野を懐しみ」(一四二四)などのやうに、動詞の連用形であったので、「―を―と思ひ」「―を―が

り」などの意であった。（沢瀉氏注釈第五歌の注）
従うべきでしょう。この場合は、「一み」だから「を」はそのまま「を」でよかったのです。

⑤ この陣営は、――総釈㈡石井氏説・全釈・豊田氏新釈・窪田氏評釈・大系・沢瀉氏注釈。

⑥ この支持は、総釈㈣窪田氏・全注釈・佐々木氏評釈・私注・全書・沢瀉氏注釈。

⑦ 古義は「妹を」のかかりを第五句と明示しています。

⑧ 難関の「憎くあらば」を削除したのは感心しません。

⑨⑩ この二歌については省察㈠に詳論しました。

⑪ 本紀要第三巻第三・四号合併の拙稿参照のこと。